



**Data**

監督：三島有紀子  
 脚本：荒井晴彦  
 原作：重松清『幼な子われらに生まれ』(幻冬舎文庫刊)  
 出演：浅野忠信／田中麗奈／南沙良  
 ／鎌田らい樹／新井美羽／  
 宮藤官九郎／寺島しのぶ／  
 水澤紳吾／池田成志

## 👁️👁️ みどころ

弁護士歴4年ともなれば、離婚や養育に関する家事事件もベテランになる。しかして、本作のような連れ子を伴うバツイチ同士の再婚で、新たに「幼な子」に恵まれた場合は、産む産まないの賛否は難しい？法律上の問題発生可能性の視点からはその答えは「否」だが、人間賛歌の視点(?)からは当然「賛」。

他方、大人になりかけた連れ子から、2人の中の赤ちゃん誕生前に、「やっぱりこのウチ、嫌だ。本当のパパに会わせてよ」と言われたら、あなたは どうする？この家族はハチャメチャになってしまうの？それとも・・・？

こりゃ難しい！観ていて、しんどい！でも、しっかり考えなければ・・・。  
 第41回モントリオール世界映画祭で審査員特別グランプリを受賞した三島有紀子監督のドキュメンタリータッチの演出と荒井晴彦の脚本に拍手！さらに、両親を演じた2人のビッグネームに加え、3人の「演技派」子役にも拍手！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■原作は？脚本は？監督は？■□■

本作の原作は、重松清の『幼な子われらに生まれ』。その概要は、ネット情報をそのまま引用すれば次のとおりだ。

三十七歳の私は、二度目の妻とその連れ子の二人の娘とありふれた家庭を築く努力をしていた。しかし、妻の妊娠を契機に長女は露悪的な態度をとるようになり、『ほんとうのババ』に会いたいと言う。私も、長女を前妻との娘と比べてしまい、今の家族に息苦しさを覚え、妻に子供を堕ろせと言ってしまふ。「家族」とは何かを問う感動の長篇小説。

そして、本作の脚本は、荒井晴彦が書いている。私は荒井晴彦の名前を『この国の空』（15年）ではじめて知ったが（『シネマルーム36』26頁参照）、1947年生まれの彼は、日活ロマンポルノの名作『赫い髪の子』（79年）や薬師丸ひろ子主演の『Wの悲劇』（84年）、そして『KT』（02年）（『シネマルーム2』211頁参照）等の脚本を書いていた著名脚本家らしい。

私はつい先日、シネ・ヌーヴォで2017年9月2日～15日まで「70になった全身脚本家」と題して「荒井晴彦映画祭」を行う旨の連絡もらったが、そのチラシによれば、荒井氏の略歴は次のとおりだ。

### 荒井晴彦 略歴

1947年1月26日東京生まれ、都立立川高校卒。大学在籍時の1971年より若松プロで助監督、そして足立正生と共に出口出ネームにより脚本を執筆。その後ピンク映画の助監督、脚本執筆を経て、1977年日活ロマンポルノ『新宿乱れ街 いくまで待って』で注目を浴びる。以後、薬師丸ひろ子主演『Wの悲劇』を始め、数々の話題作、傑作を執筆してきた。日本アカデミー賞優秀脚本賞、キネマ旬報脚本賞、毎日映画コンクール脚本賞、日本シナリオ作家協会最優秀脚本賞など、脚本賞の受賞は数多い。2016年には読売文学賞戯曲・シナリオ賞を受賞した。映画監督としては『身も心も』（1997年）『この国の空』（2016年）の2本を発表。1989年より現在に至り季刊誌『映画芸術』の編集・発行人を努めている。

その荒井氏は、重松氏が1996年に『幼な子われらに生まれ』を発表したときから、映画化の約束をしていたそうだ。その脚本がなぜ三島有紀子監督の手に渡り、なぜ彼女が本作を監督することになったのかは知らないが、元NHKのディレクターとして数々のドキュメンタリーを手がけてきた三島監督だけに、本作でもドキュメンタリータッチの描き方が顕著だ。しかも、『繕い裁つ人』（15年）（『シネマルーム35』未掲載）で見たとおりの、女性監督らしい神経の行き届いた細やかな演出が本作では際立っている。8月に公開される映画は大作が多いが、本作はテアトル梅田で上映される小作品。しかし、新聞紙評でも好評だし、前述のラインナップから見ても、こりゃ必見！

## ■□この大層なタイトルは一体ナニ？夫婦の設定は？■□

近代明治政府が確立した以降の日本は、日清、日露戦争を経験する中で多くの兵士を必要としたから、国力増強のためにも「産めよ増やせよ」の大合唱だったし、太平洋戦争中もそうだった。しかし、戦後は経済的要因によって自然に人口増となった私たち団塊の世代があったものの、今や人口減少が大きな社会問題になっている。中国では、日本と逆に人口増を食い止めるため、長い間、国が強制的な「一人っ子政策」をとってきたが、数年前にそれは廃止されている。そんな時代に入ったためか、日本では今や子供が生まれてくることに敏感となり、ありがた味を感じているが、それにしても『幼な子われらに生まれ』とはなんとも大層なタイトル。原作も本作も、なぜそのタイトルに？また、浅野忠信と田中麗奈が演じている夫婦はいったいどんな夫婦なの？

本作冒頭に見る浅野忠信演じる、スーツにネクタイ姿の中年男・田中信は普通のサラリーマン。妻の奈苗も専業主婦のようだし、夫婦が住んでいる斜行式エレベーターのあるマ

ンションは、夫婦者ばかり住む関西では有名な団地。そこは私もかつて神戸方面のゴルフに車でいったときによく通っていた西宮名塩団地だ。三島監督が本作で田中夫婦が住む舞台にここを選んだのは、ここは典型的なサラリーマン家族が住むマンションとして最適と考えたためというから、なるほど、なるほど・・・。

この夫婦には2人の女の子がいるようで、長女・薫（南沙良）は小学校6年生、次女・恵理子（新井美羽）はまだ幼稚園児だ。夕方に仕事を終えた信の日課は子供のためにケーキを買って家に帰ることだし、彼の子供たちのかわいがりようも並大抵ではない。こりゃ私にはとてもできなかつたことだが、本作導入部におけるそんな信の姿を見ているとこれぞまさに今風のサラリーマンの典型的な4人家族。そう思ったが、イヤイヤ実は・・・？

## ■□■共にバツイチ！妻には2人の連れ子、夫は外で面会！■□■

私も離婚経験があり、バツイチの再婚だが、私の妻は初婚。しかし、田中夫妻は2人ともバツイチで、薫・恵理子姉妹は奈苗と前夫との間の子供らしい。したがって、導入部で見た斜行式エレベーター付きの団地で暮らす4人家族は一見幸せそうだが、最近少し大人になってきた長女・薫が「こんな家族はイヤだ」「ホントのお父さんに会いたい」と言い始めたところから、大きな軋みが生まれているらしい。さらに導入部では、信が公園で沙織（鎌田らい樹）と呼ぶ女の子と楽しく遊んでいるシーンが登場するが、それは私たち弁護士という言葉で言う、離婚した父親と母親が親権・監護権を持つ子供との面接交流権にもとづく風景であることがわかる。なるほど、信は現在の妻・奈苗との間では奈苗の連れ子である薫と恵理子をかわいがりつつ、3ヵ月に1度は、離婚した元妻との間の血のつながっている沙織と面会交流し、かわいがっているわけだ。

ちなみに、本作の時系列は三島監督流にうまく構成しているが、信、奈苗それぞれの離婚原因とバツイチ同士が再婚した事情はドキュメンタリータッチで（？）よくわかるように示してくれている。それを要約すると、①信の元妻・友佳（寺島しのぶ）はキャリアウーマンで、子供より自分の研究を重視していたため、2人の価値観の不一致が離婚原因、②奈苗の元夫・沢田（宮藤官九郎）は子供が嫌いなうえ、奈苗から束縛されることに耐えかねて暴力亭主になったことが離婚原因だ。したがって、奈苗が信から、「俺たち結婚しよう」との言葉を聞いたとき、奈苗はホントにうれしそうだったが、されそれから4年経った今は？あのかきは薫も恵理子も小さかったが、今や薫が「あんたはホントのパパじゃない」「ホントのパパに会いたい」と言い始めると・・・。

## ■□■浅野忠信の演技力に注目！■□■

私は子育てには全然熱心でなく、外でバリバリ働くタイプの父親だったが、本作の信はその逆で、ものすごい子煩悩。直属の上司との2人の飲み会で信が密かに聞いた話によると、信の勤めている商社で信は同期の中で最も期待されていたそうだが、①残業はしない、②宴会は1次会のみ参加、③休日出勤はせず家族サービス優先、というスタイルを貫徹させてきたこともあり、会社で現在進行中の人員削減プランの中、信は本社から現場の子会

社への派遣社員の筆頭に挙げられているらしい。現実そんな「格下げ人事」が実行され、ロボットのような配送の仕事に回されても、信は妻にもグチこぼさず現場ではきちんとネクタイの上に作業服を着て頑張ってるから、偉いものだ。家庭内における妻への接し方もほんとに模範的な亭主であり、2人の子供達への接し方も本当に模範的な父親だ。しかし、会社の同僚から勧められた「1人カラオケ」での欲求不満の解消ぶりをみていると、その身体と精神の中にたまってるストレスは相当なもの・・・？

『モンゴル』(07年)でチンギス・ハーン役を演じた時の浅野忠信は鬼気迫るものがあった(『シネマルーム19』150頁参照)が、本作で彼が見せる良きサラリーマン、良き夫、良き父親としての演技も、一見静かだが実は相当鬼気迫るもの。とりわけ「部屋に鍵をつけてくれ」と迫られ、その取り付け作業をしている信や、「俺たち別れよう。子供は随すしかない」と奈苗に迫る信の姿を見ていると、同じ男として身につまされる感が強い。よくまあ、ここまでぐっと我慢できるものだ。本作では、何よりもこの浅野忠信の演技力に注目！

## ■□■田中麗奈と3人の子役の演技力にも注目！■□■

他方、奈苗の方は、薫の「ホントのお父さんに会いたい」との言葉をどう解釈してるのかよくわからないが、信のように深刻に受け止めておらず、「何とかなるわ」と、その場しのぎの対応の感が強い。血の繋がった母と娘が連れ子で再婚した場合、これくらいの問題が起きてくるのは想定内？ひょっとして奈苗にはそれぐらいの割り切りがあるのかも・・・？奈苗の対応は男の私にはそう思えるほどしたたかだが、そんな奈苗役を本作では田中麗奈が見事に演じている。

本作でさらに注目すべきは、演技派の大人2人と真正面からやり合う薫役を南沙良が見事に演じていること。初潮期を迎えている薫には「お腹が痛い」というのも1つの武器のようだが、私なら再婚した妻の連れ子からこんな対応をされれば、沢田と同じようにすぐにブチ切れているだろう。本作で一貫して無邪気なのは次女の恵理子で、恵理子を見る限り何の苦労もなさそう。他方、信と3ヵ月に1度の面会交流を楽しみにしている信の実際の長女である沙織の方は、奈苗の次女恵理子の父親が信と同じくらいの歳なのに末期がんで死にそうだと聞くと、その対応に年頃の女の子らしい苦悩が・・・。そのため、父親の死に目に急行する時はじめて恵理子と車の中で一緒になると、何ともお姉ちゃんらしい対応を・・・。奈苗の次女恵理子を演じる新井美羽は自然なままの演技かもしれないが、沙織を演じる鎌田らい樹の方は、そんな複雑な役柄をしっかりと演じている。

新聞紙評にも書かれている通り、これらの演技には三島有紀子監督の厳しい演出もあるのだろうが、本作では浅野忠信、田中麗奈という2人のビッグネームに立派に太刀打ちしている3人の子役たちの演技にも注目！

## ■□■ここまでやるか！両極端な父親の言動に注目！■□■

私も離婚経験者の一人として、小学校高学年になった子供から「父親に会いたい」と言われて会ったことがあり、以降はそれなりの交流が生まれた。そう考えれば、薫だって家の中で駄々をこねるだけでなく、ホントの父親である沢田に直接連絡をとる努力をしてもよさそうだが、本作ではそれはない。そのため本作では、やむなくある時点で信が直接沢田を訪れ、薫がホントの父親に会いたがっている旨を伝えることになるが、それに対する沢田の回答は、「会いたくない」の一点張り。しつこく信が頼み込むと、何と沢田は「金を出してくれば会ってもいい」となったから、私はビックリ！ええっ、世の中にはこんなひどい父親もいるの……。しかし、何事も実務的（事務的）な処理能力を発揮する信の手はずによって、今日は薫がホントの父親である沢田との面会日だが、さて、その「ご対面は」……？

私はそんな父親ならひょっとしてハチャメチャな結果になるかもしれないと心配していたが、薫の迎えも兼ねて頃合いを見計らって信がご対面の場となっているショッピングモール屋上の遊園地を訪ると、何とそこには沢田が1人で座っていたから、アレレ……？ 沢田とのご対面をあれほど心待ちにしていたはずの薫が沢田の前に現れなかったのは、一体なぜ？ そしてまた、家に帰っていた薫に、「今日はどうだった？」と尋ねると、薫の返事は……？

本作に見る、離婚した父親同士が微妙な雰囲気の中で、微妙な会話を交わすシークエンスは、男の私ですらかなり意外性に富んだもの。それを、いくらドキュメンタリー出身の監督とはいえ、女性の三島有紀子監督がこのように見事に演出していることに私はビックリ！ 沢田を演じる宮藤官九郎の、投げやりながらも娘との面会に向けてぬいぐるみのお土産を持って来ている姿や、信が連れてきている妹の恵理子にゲーム代（100円）を気前よく出すシーンを見ていると、この男のやるせない気持ちが十分に伝わってくる。

本作では、信と奈苗との「掛け合い」、信と友佳との「掛け合い」も見事だが、離婚した亭主同士である信と沢田との「掛け合い」も、実にお見事！

## ■□■問題解決？いやいや、問題山積！■□■

本作はバツイチ同士の再婚、そして、子連れは女の方だけという設定。これは、信の子供沙織の養育・監護権者が離婚した妻の友佳に指定されたためだ。前夫との間の子供を連れて女が再婚するケースは多いが、これは、離婚に際して子供の養育・監護権者が母親に指定されることが多いため。この場合、夫は初婚、もしくは再婚でも前妻との間に子供がいないケースが多いだろう。そして、この場合、夫は妻が連れてきた子供と養子縁組をしない限り、連れ子との間に法律上の父子関係は生じないことになる。どちらのケースでも、夫と妻の連れ子との事実上の父子関係がうまくいくかどうかは難しいが、夫にも離婚した

妻との間に子供がおり、定期的に面接交流をしている本作のようなケースでは、問題はより複雑になる。そのうえ、信と奈苗との間に新たに子供が授かり、奈苗の2人の連れ子である薫と恵理子と一緒に父母の下で生活するとすると、さらに問題が発生する可能性が高まるのは当然だ。

本作はそんな設定の下で、薫が「やっぱりこのウチ、嫌だ。本当のパパに会わせてよ」と言い始めるという1つの問題を取り上げ、その深刻性を浮き彫りにしたが、映画としてはもちろん、原作の小説でもとりあえず「問題解決」で終わっている。本作では、奈苗の体内から産まれてくる子供を、信はもちろん、薫や恵理子も祝福しているから、喜びと安堵に満たされた本作ラストの映像によってその解決ぶりは明らかだが、それって本当の解決・・・？弁護士の私には、そうは思えない。つまり、本作に見る問題解決はあくまで「一時的な落ち着き」に過ぎず、新たに産まれてきた赤ちゃんをめぐる新たな問題が出てくるだろうと予想せざるを得ないわけだ。

## ■□■審査員特別グランプリ受賞！おめでとう！■□■

近時、LGBT（女性同性愛者 Lesbian、男性同性愛者 Gay、両性愛者 Bisexual、トランスジェンダー Transgender の頭文字をとったもの）が大流行り（？）で、男同士の結婚や女同士の結婚の姿がしばしば報道されているが、この場合、法律上の子供の誕生はありえない。したがって、結婚した男同士、女同士が2人で仲良く暮らせば良いだけで、子供の養育や相続をめぐる問題は発生しない。つまり、その場合は、子供が産まれなかった、あるいは、子供を作らなかった男と女の夫婦と同じように、自分たち2人の世代だけで終わることになるから、問題は少ない。それに比べれば、新たな命を授かった信と奈苗夫妻は幸せといえば幸せだが、前途多難で、「問題山積」となるだろう。私はできれば重松清に、この夫妻の10年後に新たにどんな問題が起り、信と奈苗夫妻とそれぞれの子供たちの間がどうなっているかをしっかり書いて欲しいと思っているが、さて・・・。

以上のように本作の評論を書き終えた時点の9月5日付の夕刊で、私はカナダで開催されていた第41回モントリオール世界映画祭で4日夜（日本時間5日）に授賞式が行われ、本作が最高賞のグランプリに次ぐ審査員特別グランプリを受賞したとのニュースを読んだ。これは2014年の『ふしぎな岬の物語』（14年）（『シネマルーム35』未掲載）以来の快挙だ。また、それと同じ9月5日に、第90回アカデミー賞外国語映画賞部門の日本代表に『湯を沸かすほどの熱い愛』（16年）（『シネマルーム39』28頁参照）が決まったことが発表された。本作はもちろん、『湯を沸かすほどの熱い愛』も私は星5つをつけて絶賛しているから、そんな結果に大満足。三島有紀子監督、審査員特別グランプリ受賞おめでとう！

2017（平成29）年9月7日記